

## まえがき

### — 芸術・スポーツにおける感性論 —

本シリーズも第3巻をむかえることとなりました。この企画は平成26年に始まりましたが、この年は本学岩見沢校に「芸術・スポーツ文化学科」が新たに設置された時でもあります。これは、従来の「芸術課程」と「スポーツ教育課程」を合体してひとつの学科として再編したものです。これを機会に、かつては別々の分野であった芸術とスポーツを文化としてとらえ直す統合的研究の可能性を検討することとなりました。とりあえずその名称を「芸術・スポーツ文化学」とし、各教員から研究の成果を募集することとしました。初巻、ならびに第2巻も予想以上の投稿があり、教員の研究意識の高さが窺えました。

しかし、初巻のまえがきでも述べましたが、芸術領域の音楽および美術と、異なる領域のスポーツを一体としてまとめた「芸術・スポーツ文化学」なるものがわが国において学問的地位を確保しているわけではありません。それにもかかわらず、「芸術・スポーツ文化研究」というテーマのもとで各教員がそれぞれの研究成果を出し合い、一冊の書にまとめる意義はどこにあるといえるのでしょうか。岩見沢校における各専攻（音楽文化・美術文化・スポーツ文化・芸術スポーツビジネス）での研究成果の寄せ集めとどこが違うのかという疑問が生じるのはもっともなことです。

一般理論という概念があります。これは個別理論の対概念です。「一般」というと、「誰でも知っている」とか「どこにでもある」、あるいは「普通の」といった印象を持ちますが、ここでは個別の理論に通底する共通理論という意味です。一般理論は個別理論を土台として共通理論を形成したものであることから、内容は抽象度が高くなります。そのため、それだけ読んだのでは理解しにくいという難点があります。しかし、これによって個々の領域は異なっても共通のテーマで議論ができるという長所もあります。運動部と文化部という学校部活動の分類からも分かるように、音楽や美術の芸術領域とスポーツではまったく畑違いという見方もないわけではありません。それにもかかわらず、

共通に話し合える内容はあるものです。

岩見沢校に設置された「芸術・スポーツ文化学科」には、学科共通科目として全専攻生が共に学ぶことができる授業が開講されています。「芸術・スポーツビジネス入門」や「地域プロジェクト」のような実践を重視した科目とならんで、文化共通科目として「感性」「身体」「表現」という科目が置かれています。この他にもいくつかの科目が設定されていますが、なかでもこれらの3科目は、どの専攻の学生にとっても深く理解する価値のあるテーマだといえます。いわば共通の話題が生じる可能性のあるテーマです。したがってこの3科目は全員必修となっています。

一例として、ここで「感性」をとりあげ、どのような共通性が議論可能なのか検討してみましょう。

感性とは「外界の刺激に応じて、感覚・知覚を生ずる感覚器官の感受性」（広辞苑）とか、「物事を心に深く感じ取る働き」（大辞泉）と一般には説明されていますが、古来より哲学者のあいだでは悟性、理性とならんで人間の認識にとって不可欠の能力とされてきたものです。つまり、論理的あるいは概念的思惟能力とは異なって、感覚的に物事をとらえる力といえます。原語である *sensibility, sensitiveness*（英語）、*Sinnlichkeit, Sensibilität*（ドイツ語）から分かるように感覚を駆使した認識能力です。

われわれは日常の中でさまざまな「もの」、あるいは「こと」を認識していますが、その中には数値や言語的概念を通して論理的に把握する仕方とならんで、さまざまな知覚を通じた印象、雰囲気など、〈揺らぎ〉を特性とした全体的把握の仕方としての感性的認識が機能しています。『感性の思考』を著したヴェルシュがいうように、ここでいう知覚とは「単なる感覚的知覚（*Sinneswahrnehmung*）にとどまらないさまざまな知覚」ととらえなければなりません。つまり、知覚とは受動的なものとしてではなく、「むしろ感じとることという、より基礎的であると同時により広範な意義において理解されねばならない」ものです。これらのことから、同書の訳者である小林信之は「感性は、もっとも原初的な感覚の次元から、象徴や隠された意味の読解といった

高次の精神的動きにいたるまで、広範な作用を包含することになる」と述べています。

この感性についての学問が感性学（論）ということになります。それは Ästhetik（独）、aesthetics（英）に由来する語ですが、言うまでもなくわが国には、この Ästhetik に対して「美学」という訳語がすでに長く定着しています。美学とは美術に関する理論体系という認識が一般的です。スポーツでも美学が論じられることはありますが、フィギュアスケートや体操競技などの美を競う採点競技を除いて直接的対象となることはあまりありません。泥だらけのグラウンドや汗まみれのトレーニング場面は、美学とはおよそ縁のない世界と考えられるのでしょうか。音楽でも、「美しい音色」という表現はみられますが、美そのものについて議論されることはあまりないと思われまふ。やはり美学は美術の理論なのです。

しかし、Ästhetik はドイツのバウムガルテンが講義録をラテン語でまとめた “aesthetica” に遡ることができるといわれています。この aesthetica は感覚を意味する語であることから、Ästhetik は「感覚論」「感性論（学）」というのが本来の語義なのです。

そのようにとらえると、Ästhetik は美術の学問としての「美学」の範囲を超えて、人間のあらゆる場面で重要な役割を果たしていることとなります。たとえば、スポーツにおいては、動きの美的視点だけでなく、全体性の観点から動きの質的特性をとらえる認識法として不可欠の理論領域となります。現にこのような研究領域はある（たとえば『動きの感性学』マイネル）のですが、今日の自然科学一辺倒の時代においては主流というわけにはいきません。しかし、人間の動きは科学的に測定し、明確な数値に表せるものだけで成り立っているわけではありません。科学は、測定可能なものしか最初から相手にしないのです。距離や時間などは厳密に測定可能ですが、それだけでは人間の動きの質的特性を把握することはできません。たとえば、100m 競走の成績は所要時間で決定されますが、その順位と動き方、つまり走り方の質とは必ずしも一致するとは限りません。動きの良し悪しの判断をストップウォッチだけに頼っている指導者はいません。かならず質的内実、たとえば流動性、リズム、調和な

どを基準としているはずで、その判断がどうできるかが指導者の見る眼といえます。また、剣道や柔道の「一本」は物理的尺度では到底区別できません。これらの判断には豊かな経験を土台とした高度な感性が求められます。

感性は人間の生のすべてにおいて本質的な役割を果たしていますが、とりわけ芸術やスポーツにおいては格別の意義をもっているといえます。芸術作品をみた感想をどんなに多彩な語彙を駆使して綿密に説明しようとしてもしきれぬものではありません。というより、ことばは集合的使用の歴史を背負った一般意味をもつという本質的特性からいって、個人の思いのひとつひとつに対応することは不可能です。音楽の演奏やスポーツシーンの感動を伝えようとしても同様な問題が生じてきます。したがって、真の意味で芸術やスポーツに親しむには、それを理解する感性を磨くしか方法はありません。われわれの「芸術・スポーツ文化研究」の成果はそこに貢献できるものが求められるでしょう。具体的にはどのような方法が考えられるでしょうか。

音楽学の立場から美学を論じた津上英輔は『あじわいの構造 感性化時代の美学』という書の中で、われわれにヒントとなる記述を残しています。感性は多かれ少なかれ誰でも持っているものといえますが、どんなレベルで、何を感じ取れるかという点においては大きな差があります。彼はそれを「感性的質」と呼び、「意識的に深まりを追求することのできるあじわい」と説明しています。その例として、「何らかの外的契機に促され、非感性的認識と化合して、完成に至る事態を感性的認識への完成」と表現しています。これは、美術作品や音楽の鑑賞の際に、本来は感性とは異質なものに関する知識を得ることによって、一層、見たり聴いたりする質の深みが増すということを説明したものです。たとえば、ヨーロッパの古典絵画を見るとき、キリスト教の歴史を知っているのと知らないのでは鑑賞の質が大きく異なってきます。スポーツにおいても、フィギュアスケートの流れるような演技に感動するのは当然としても、純粋に物理尺度で勝敗が決定される陸上競技や水泳などにおいてさえトップアスリートの動きの美しさに感動する人は少なくありません。スポーツの勝敗だけでなく、選手の動き方にまで関心が向かうようになればスポーツの通となる

ことができます。あじわいの深みといえるでしょう。

このような観点からも、本学教員の研究・教育が地域の人々の感性的質を高める手助けとなることは確実です。研究成果が、人々の美術作品の見方、音楽演奏の聴き方、スポーツのプレイの読み方などを高めることにつながるのなら、地域の文化意識の高揚に貢献する意義ある内容といえるでしょう。卑近な例ですが、私にとってカンディンスキーなどの抽象絵画は単なる幾何学的図形としてしか見えず、そこに芸術的な価値を見いだすことができませんでした。しかし、本書前巻（『芸術・スポーツ文化研究2』）において、新井義史教員が著した「身体感覚の観点による美的形式原理の理解」という論考を読んだから、この種の作品に対してこれまでとは別の視点で向かうことができるようになりました。専門家からみれば低次元の話ですが、私個人の中での感性的質が高まったといえると思います。

芸術とスポーツ領域における共通的研究領域の可能性に関して感性について述べてきましたが、その他にもすでに紹介したように「表現」や「身体」など、すべての領域に関係の深い内容は存在すると思います。また、このような人間に関する根源的観点でなくても、マネジメントなどのような実践的分野についても共に考えることのできる研究は少なくありません。

共通する研究分野についてはばかり述べましたが、一般理論は個別理論なしには存在し得ませんので、音楽・美術・スポーツ・ビジネスそれぞれの分野で個別研究を積み上げていくことは最重要の課題です。それらをもとに、通底する内容を議論することによって統合的「芸術・スポーツ文化学」が形成されていくことになります。

文化としての芸術やスポーツを享受し、同時に地域のひとびとにそのよろこびを伝えていくことを目的としている本学岩見沢校の新学科は、個別実技科目の集合の次元を超えて、文化レベルでの共通的研究を推進できる研究体制の構築が求められるでしょう。本書がそのきっかけとなることを期待しています。



芸術・スポーツ文化学研究 3

---

目 次

まえがき — 芸術・スポーツにおける感性論 — ..... 佐藤 徹…i

文化資源研究領域

書の表現と精神性 ..... 青木 英昭…3

はじめに 3

第1節 墨跡とは 4

第2節 墨跡の魅力 5

第3節 禅文化の7つの性格 6

(1) 不均斉 6

(2) 簡素 7

(3) 枯高 8

(4) 自然 8

(5) 幽玄 9

(6) 脱俗 9

(7) 静寂 10

第4節 7つの性格と書 11

第5節 書の創作 13

(1) 不均斉な表現 13

(2) 簡素な表現 13

(3) 枯高な表現 14

(4) 自然な表現 14

(5) 幽玄な表現 15

(6) 脱俗の表現 15

(7) 静寂の表現 16

おわりに 16

## 構成的観点によるコンポジションの心的理解

— 造形用語を活用した絵画構造の検討 — …………… 新井 義史…19

はじめに 19

第1節 コンポジションの意味とその変化 20

(1) 構図・構成・レイアウトの類似と相違 20

(2) 具象絵画における構図様式 21

(3) 「見える構図」から「感じる構成」へ 22

第2節 作品構造の層的特性 23

(1) 内容理解のためのアプローチ方法 23

(2) 画面の多層性 24

第3節 多層構造と造形用語による特徴分析 26

(1) 多層構造の概念図 26

(2) 「奥行き空間」を持つ作品 27

(3) 「平面化」傾向の作品 28

(4) 「単純化」・「フォーマリズム」傾向の作品 29

(5) 「構成本位」の抽象絵画 30

(6) ベースとしての「グリッド・システム」 31

(7) マトリックス的配置による造形性の理解 32

おわりに 33

## 「身近な」デジタル環境を使ったあそびの創造

— カードゲーム「あやかしリーダー」制作実践からみる一考察 —

…………… 三浦 啓子・倉重 哲二…36

はじめに 36

第1節 環境と遊び 37

第2節 テレビゲーム批判 38

第3節 創造的なテレビゲーム 41

第4節 「ゲームを作る」を民衆に 43

第5節 カードゲーム制作実践 47

- (1) 開発の経緯 47
  - (2) 開発環境の調査 48
  - (3) ゲームデザイン 50
  - (4) 「あそびプロジェクト」での実践 52
- おわりに 54

## ショパンの『バラード』における様式の多彩性

- ピアノ演奏に活かすためのアイデア — …………… 水田 香…58
- はじめに 58
- 第1節 ショパンの作品に見られる時代性について 59
- (1) ショパンの古典性とは 59
  - (2) ショパンのロマン性とは 61
  - (3) ショパンの音楽の本質 63
- 第2節 ショパンの『バラード』に見られる様式の多彩性 64
- (1) 『バラード』に見られる古典性とロマン性について 64
  - (2) ソナタ形式の追加 65
  - (3) ピアノの扱い、ピアニストの目 66
- 第3節 演奏への活かし方 67
- おわりに 71

## 大学生の障害者イメージおよび障害者スポーツに関する認知度

- スポーツ系学生と非スポーツ系学生の比較検討 — …………… 大山 祐太…74
- はじめに 74
- 第1節 背景と目的 75
- (1) 「パラリンピック」の認知度と理解度のギャップ 75
  - (2) 「障害者のスポーツ＝パラリンピック」という図式の懸念 76
  - (3) 障害者イメージも考慮した総合的考察の重要性 76
  - (4) 次世代を担う大学生の認識を把握する意義 — 専門性の差異に着目して —

(5) 目的	77
第2節 方法	78
(1) 調査対象とデータの収集方法	78
(2) 調査の内容	78
(3) 分析	80
(4) 倫理的配慮	81
第3節 結果	81
(1) 基本項目	81
(2) 障害者との接触抵抗感	82
(3) 障害種によるスポーツ困難性の認識	82
(4) 障害者イメージ	83
(5) 障害者のスポーツ大会に関する認知度	83
(6) パラリンピック競技に関する認知度	85
第4節 考察	87
(1) 障害者に対する抵抗感の傾向	87
(2) 障害者のスポーツ大会およびパラリンピック競技の認知度	88
(3) 今後の障害者スポーツの振興に向けて	90
第5節 今後の課題	91
おわりに	91
<b>吹奏楽教育を通じた人間形成パラダイム構築とその重要要素の解析</b>	
— 基本練習の本質、呼吸法の推移と社会性 — …………… 渡部 謙	96
はじめに	96
第1節 基礎練習とは	97
(1) 呼吸法	98
(2) 正しい呼吸法とは	98
(3) 呼吸法の都市伝説	99
(4) 腹式呼吸	100
第2節 呼吸法都市伝説の始まり？ 日本西洋音楽の導入初期	101

(1) 日本人と西洋人の意識の違い	102
(2) 日本人と欧米人の身体の違い	103
(3) 技としての呼吸	104
第3節 呼吸法の推移から見る現代性と人間社会性	105
(1) 3人の賢者	105
(2) 息を吐くこと、特にゆっくり吐くことの重要性	107
(3) 呼吸における不自然性。意識と無意識	108
(4) 呼吸における不自然性。長く吐くことの重要性	109
おわりに	110

## 指導研究領域

### 幼児教育から造形教育へのアプローチ

— 子どもの手の巧緻性と造形教育 —	阿部 宏行…115
はじめに	115
第1節 研究の背景と動機	115
(1) 研究の発端	115
第2節 デンマークの幼稚園訪問に際して	116
(1) 海外の幼児教育と創造的な活動	116
(2) デンマークの幼児教育	117
(3) 子どもの遊びは生活そのもの	120
(4) 自己の確立と自己責任	120
(5) 自立と自己責任	121
(6) 協働と相互扶助	122
第3節 ドイツの幼児教育	122
(1) ドイツ訪問にあたって	122
(2) ドイツの幼児教育の実際	123
第4節 手の巧緻性と玩具	128

(1) 子どもの発達と玩具	128
(2) 子どもの能力の育成	131
おわりに	131

## 箏らしい奏法を活用した創作学習の考察

一 日本の音文化の視点から — ……………	尾藤 弥生…	134
はじめに		134
第1節 研究の背景と目的		134
第2節 日本の音文化について		136
(1) 日本の音文化の全般的特徴		136
(2) 日本の音文化と日本の伝統文化の関わり		138
(3) 箏の演奏・奏法を通して体験できる日本の音文化の特徴		139
第3節 先行研究のリサーチ		140
第4節 箏らしい奏法を活用した創作学習の実践計画の提案		142
(1) 実践概要と教材		142
(2) 研究対象者と研究方法		143
第5節 実践結果および考察		144
(1) 箏の奏法の活用状況の結果および考察		144
(2) 箏の奏法と日本の音文化の特徴との関係性についての結果および考察		145
(3) 箏の奏法について西洋音楽と比較して分かったことの結果および考察		148
(4) 創作作品例からみる、日本の音文化の体感に関する考察		152
おわりに 結論と今後の課題		153

## 「学際的研究」の発展性から見た「境界（ボーダースタディス）」の授業の意義 についての研究 …………… 深井 尚子…

はじめに	156
第1節 学科共通科目「境界」の概要	157

(1) 「境界」の定義	157
(2) 授業形態の概要	157
(3) 全5回の授業のテーマと「境界」の関連性	160
第2節 ベートーヴェンを「境界」から見直す意義	160
(1) ベートーヴェンの生きた時代	161
(2) 18世紀～19世紀前半のヨーロッパ思想の変化	162
(3) 「境界」の観点からのベートーヴェンの考察	163
第3節 学際的研究の方向性の考察	164
(1) 音楽における学際的研究の具体例	164
(2) よいピアノ演奏とスポーツコンディショニングの融合の意義	165
(3) 受講学生から見た「境界」の意義	166
おわりに	168

## アメリカ中西部におけるピアノ指導の視察報告

— ミシガン大学の調査を中心に —……………松永 加也子…173

はじめに	173
第1節 ミシガン大学における視察	174
(1) ミシガン大学音楽学部の概要	174
(2) カリキュラムについて	175
(3) 授業の詳細について	176
(4) まとめ	186
第2節 メリット音楽スクール視察	187
(1) メリット音楽スクールの概要	187
(2) メリット音楽スクールのプログラム	187
(3) 10月20日メリット音楽スクール初級クラスのグループ・レッスン見学	
(4) まとめ	192
おわりに	193

中級以上のヴァイオリン学習者に対する、右手の基礎再構築法の一考察  
—セブシク ヴァイオリン教本作品3を事例として— … 長岡 聡季…197

はじめに 197

第1節 技術の再構築とは 198

(1) バロック・ヴァイオリンの奏法研究 198

(2) 「無意識」な動作 199

(3) デメリットとしての無意識 200

(4) メリットとしての無意識 201

(5) 現象 201

(6) 音は接点で創られる 202

第2節 事例 セブシク ヴァイオリン教本 作品3 主に前半部分を用  
いて 204

(1) この教本を用いる理由 204

(2) 具体例 205

おわりに 213

## 地域文化研究領域

無形の文化財を中心とした包括的な文化財の保護に関する一考察  
…………… 角 美弥子…219

はじめに 219

第1節 無形の文化財とは 219

(1) 日本の文化財保護法における無形の文化財の定義 219

(2) ユネスコによる無形文化遺産の定義 220

(3) 無形の文化財の範疇 221

第2節 無形の文化財の構成要素 221

(1) 無形の文化財としての能の構成要素 222

(2) 能楽に関連する指定文化財 224

(3) 無形の民俗文化財の構成要素	225
第3節 文化財の包括的な保護に関連する施策と無形の文化財	226
(1) 選定保存技術	226
(2) 歴史文化基本構想	227
(3) 歴史文化基本構想に関する支援方策	229
(4) 歴史まちづくり法（地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律）	229
第4節 無形の文化財の包括的な保護とは	230
おわりに	231

“ロベレート・モーツァルト音楽週間 2016”における、北海道教育大学・実験劇場公演の意義…………… 塚田 康弘…233

はじめに	233
第1節 札幌市から受けた3年間の受諾事業の成果	234
第2節 ロベレート・モーツァルト音楽週間について	238
第3節 ロベレートでの実験劇場	240
おわりに	242

**複合文化研究領域**

日本の芸術・スポーツ教育制度の現状と課題…………… 門脇 正俊…249

はじめに	249
第1節 芸術・スポーツ教育の法制的制度	250
(1) 日本国憲法・教育基本法と芸術・スポーツ文化教育	250
(2) 文化芸術振興基本法とスポーツ基本法の教育規定	251
(3) 学校制度における芸術と体育	252
(4) 社会教育制度における芸術とスポーツ	257
(5) 「文化の日」と「体育の日」の教育制度的意義	258

(6) 芸術教育とスポーツ教育の行政制度	259
第2節 芸術・スポーツ教育の慣行的制度	260
(1) 課外活動としての部活動やサークル活動の制度	261
(2) 発表会や競技会の制度	262
(3) 民間教育施設：音楽・美術・スポーツ教室	263
第3節 芸術とスポーツの教育制度をめぐるいくつかの問題	264
(1) 芸術における英才教育をめぐる	264
(2) 芸術・スポーツの教員・専門家養成制度の歴史と課題	266
おわりに	266

## 健康・スポーツ科学からみた楽器演奏・スポーツパフォーマンスの共通視点 — 脱力と出力 — …………… 寅嶋 静香・山田 亮…268

第1節 優れた音楽家とスポーツ競技者の共通点：よい演奏とよいパフォーマンスの原点	268
第2節 筋—関節運動からみた「よい演奏」「よいスポーツパフォーマンス」の神経生理学的背景：脱力と出力	270
第3節 脱力と出力を生み出すためのコンディショニング方法の提案	273
おわりに	274

## 北海道アールブリュットネットワーク協議会「障害者の芸術活動支援モデル事業」から…………… 三橋 純予…276

はじめに	276
第1節 厚生労働省「障害者の芸術活動支援モデル事業」	277
(1) 障害者の芸術活動支援の趣旨と方向性	277
(2) 「アール・ブリュット」という呼称に関する議論	278
(3) 具体的な支援の在り方と厚労省モデル事業	279
第2節 北海道アールブリュットネットワーク協議会の取り組み	280
(1) 広域ネットワークへの取り組み	280
(2) 糸賀一雄記念未来賞	281

(3) 平成 27 年度の主な活動	282
(4) 「北海道アールブリュット・フォーラム 新たな可能性の探究～芸術文化 とわたしたちの交差点～」	285
第 3 節 北海道アール・ブリュット 2016 in 岩見沢	286
(1) 岩見沢市における取り組み	286
(2) 「北海道アール・ブリュット 2016 in 岩見沢」	287
(3) アール・ブリュット展	288
(4) 岩見沢校の関わり	289
おわりに	290

## 芸術・スポーツビジネス研究領域

### 子育て支援型アートイベント参加者のイベントに対する意識

—「それは、それは、クリスマス。」を対象にした因子分析—

.....福原 崇之・関 鎮京...295

はじめに 295

第 1 節 「それは、それは、クリスマス。」概要 296

- |                 |     |
|-----------------|-----|
| (1) 開催概要        | 296 |
| (2) フロアとプログラム構成 | 296 |
| (3) コンセプト&ネーミング | 299 |
| (4) 来場者数        | 300 |
| (5) 時間軸とプログラム   | 300 |

第 2 節 札幌市教育文化会館の概要 302

- |                      |     |
|----------------------|-----|
| (1) 札幌市教育文化会館の建設背景   | 302 |
| (2) 運営現状             | 302 |
| (3) 事業               | 303 |
| (4) 子ども支援型コンサートの取り組み | 304 |

第 3 節 来場者が「母と子」を対象としたコンサートに望むイメージ 305

(1) 来場者のデモグラフィックス 305

(2) 来場者の因子分析 307

おわりに 311

## スポーツクラブにおける複合的マネジメントの必要性…………… 曾田 雄志…313

はじめに 313

第1節 日本における現代スポーツクラブの課題 314

第2節 ノルディニア北海道に関して 317

第3節 複合的マネジメントの種類と効果 319

(1) 「クラブ理念」マネジメントに関して 320

(2) 「組織、役割分担」マネジメントに関して 320

(3) 「クラブスタッフ」マネジメントに関して 321

(4) 「チーム」マネジメントに関して 322

(5) 「チームスタッフ」マネジメントに関して 322

(6) 「選手」マネジメントに関して 322

(7) 「コーチング」マネジメントに関して 324

(8) 「トラブル (リスク)」マネジメントに関して 325

おわりに 325

## ソーシャル・エンタープライズと芸術

— タイの人形劇が地域社会に及ぼすインパクト — …………… 岩澤 孝子…327

はじめに 327

第1節 ソーシャル・エンタープライズとしてのアーティスト集団のあり方  
328

(1) ソーシャル・エンタープライズ 328

(2) タイにおけるSEとセマタイマリオネット財団 329

第2節 社会のための芸術 330

(1) セマタイマリオネット財団 330

(2) アーティスト集団とビジネス 331

第3節	セマタイムリオネット財団と学校人形劇	333
(1)	アムパワーハーモニーストリングパペットフェスティバル	333
(2)	学校人形劇団に対する聞き取り調査とその分析	336
(3)	自立的で持続可能な芸術活動による地域支援	339
	おわりに	341
	あとがき	344
	著者紹介	346